

# 第61回小矢部市社会福祉大会

## ・・・ プログラム ・・・

と き : 令和4年10月22日(土) 13:00~16:00

と ころ : クロスランドおやべ「セレナホール」

### 日 程

12:30~13:00 受 付

#### 《社会福祉大会》

13:00~14:00 ○ 式典(表彰)・議事

14:05~14:50 ○ 福祉作文朗読  
(小・中・高校生 最優秀者 各1名)

○ 福祉教育実践事例発表  
(小矢部市立大谷中学校)

15:00~16:00 ○ 講 演  
演 題 庭に小さなカフェをつくったら、みんなの  
居場所になった  
ー小さなカフェが人・地域をつなぐー  
講 師 一般社団法人Ponteとやま  
理事(みやの森カフェ店長)加藤愛理子 氏

16:00 閉 会

#### ◆「福祉の店」出店コーナー

12:00~16:00 エントランス

[溪明園・福祉作業所あけぼの・トライ工房・斉藤商店]

## 被表彰者名簿 (敬称略)

### ★ 社会福祉協議会長 表彰

#### ◇ 個人の部

芝田 一雄 (西 町)	中村 洋平 (砺波市)
稲原 恵美 (西中野)	浅野 純子 (和 沢)
✓ 川原 久俊 (津 沢)	本田恵理子 (五 社)
✓ 辻田 正雄 (新 西)	村上 光則 (道坪野)
✓ 飯原 榮 (津 沢)	山田 一枝 (峯坪野)
中嶋 幹博 (小森谷)	

#### ◇ 団体の部

小矢部市手をつなぐ育成会

#### ◇ 民生委員・児童委員の部

片山 奨 (谷坪野)	河原 克美 (新富町)
長田 雅男 (末 友)	

### ★ 社会福祉協議会長 感謝

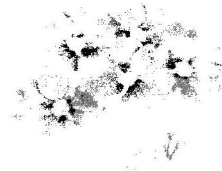
#### ◇ 民生委員・児童委員の部

川眞田良和 (石 坂)	福井 進 (五郎丸)
川田 正一 (金屋本江)	吉田 富子 (水 島)

### ★ 善意銀行頭取 感謝

#### ◇ 団体の部

小矢部市長寿会連合会



## 福祉作文入選者 (市内小・中・高校よりの応募)

#### ◇ 小学生の部

✓ 最優秀	津 沢 小 学 校	長谷川心優	5 年生
優 秀	石 動 小 学 校	岩崎 成美	5 年生
優 秀	石 動 小 学 校	草 詩音	5 年生
✓ 優 秀	津 沢 小 学 校	滝田 百花	5 年生

#### ◇ 中学生の部

✓ 最優秀	津 沢 中 学 校	宮森 美樹	2 年生
優 秀	石 動 中 学 校	東 真緒	2 年生
優 秀	蟹 谷 中 学 校	中田 柊馬	2 年生

#### ◇ 高校生の部

最優秀	となみ野高等学校	二口紗妃菜	1 年生
優 秀	となみ野高等学校	中島 菜緒	3 年生

野球場での小さなボランティア

津沢小学校五年 長谷川 心優

今年のゴールデンウィークに、中学生の兄の野球の大会がありました。私は、父と母と弟と一緒に、応援に行くことになりました。そこでは、父母は野球の大会の準備をすることになっていました。父と母は、とてもいそがしく動き回り、弟の面倒を見ることができなくなっていました。また、試合の会場には、兄のチームメイトの小さな弟や妹も集まりました。そこで私は、弟を車いすにのせて小さな弟妹たちのお世話をするボランティアを引き受けました。私の弟は、一才年下です。弟には、生まれつきの病気があります。だから、歩くときにぐらぐらといういろいろな方向にゆれてしまいます。そのため、両足には装具をつけています。そして歩くときには、家族のだれかや、学校の先生、まわりのみんなに手をつないでもらいます。ただ、とても広い場所を移動する時は、車いすの力を借りません。

私は、弟を車いすにのせて歩きながら、野球場の周りを散歩しました。天気の良い日だったので、太陽で暑くならないように日かげの道を選んだり、と中で飲み物を飲んだりしながら、一緒に景色を楽しみました。車いすをおしていくと、ちよつとした段差が歩きにくかったり、坂道を上るのがとても大変だったり、いつもなら気にかげなかつたことが分かりました。小さなお友達とは、丘にさいた花をつんだり、アスレチックで遊んだりしました。弟も、アスレチックを見ると、

「ぼくもやってみたい。」

と言うので、手をつないで一緒に、アスレチックの階段を上りました。小さなお友達は、みんな自由にたくさん走っていたので、私は、みんなが楽しく安全に遊べるように、目を配って考えながら行動しました。

たくさん遊んだ後は、みんなそろって野球場の応援席にもどりました。みんなのお母さんから、

「ありがとうね。」

と声をかけられました。私はすっきりとした気持ちになりました。

花をつんだり、アスレチックで遊んだりしました。弟も、アスレチックを見ると、

「ぼくもやってみよう。」

と言うので、手をつないで一緒に、アスレチックの階段を上りました。小さなお友達は、みんな自由にたくさん走っていたので、私は、みんなが楽しく安全に遊べるように、目を配って考えながら行動しました。

たくさん遊んだ後は、みんなそろって野球場の応援席にもどりました。みんなのお母さんから、

「ありがとうございます。」

と声をかけられました。私はすっかりとした気持ちになりました。

「ボランティア活動」というと、とてもむずかしいことで、私にはできるかなと考えてしまいます。でも、私が野球場で過ごした時間のように、相手に困っている事があれば、それを見つけて自分のできる行動をすることだと思います。それが、私が思うボランティア活動です。

私の父と母は言います。

「自分ができることを見つけて、それを一生けん命がんばればいい。」だから、私は学校や外に出かけた時に、何か困っている人を見かけたら、勇気をもって助けることができる人でありたいです。その手助けがいつでも進んでできるように、私は毎日の生活で、弟のお世話をがんばります。



安心してくらせる未来へ

津沢小学校五年 滝田 百花

一学期の学校の授業で点字について勉強する機会がありました。

点字とは、目の見えない人、見えにくい人が指先を使って読む文字です。点字にはもりあがった凸点が使われ、一マスに六点（たて三つ、横二つ）を一単位とします。六つの点は、位置によって①～

⑥の番号が決まっています、どの番号の点がもりあがっているかで、言葉や数字を表します。

身のまわりには、視覚しようがい者の方のための工夫がいくつもあります。例えば、お酒の上部に「おさけ」と書いてあったり、お札にびみょうな凸凹があったり、各社ちがいますが、牛乳パックの開け口に切り込みが入っていたりします。でも、あまり多くの製品に点字がないので、もっとふえてほしいです。

その中でも、駅の点字ブロックは、白杖の方が使い、「案内ブロック」という目的地に案内するブロックと、「けい告ブロック」という、ここからはあぶないということを教えてくれるブロックの二種類があります。

けい告ブロックは、かいだんの前や駅のホームなどのところでもつまずいたり、事故につながるようなよう、工夫がされています。

案内ブロックの上には自転車をとめる方がおられますが、視覚しようがい者の方にとっては、「ここでもいいや」ととめたとしても、それを視覚しようがい者の方がよけて道路にでてしまい、事故にもつながります。このような軽い考えで、視覚しようがい者の方が困ることになるのです。

もしも自分が今、目が見えなくなったら、家や学校への登下校もむずかしいと思います。なぜなら、家は自分で階だんもおりれず、移動・運動・操作能力が制限されます。登下校では、車などの音を聞いて歩けるかもしれませんが、何かにつかかってよけて車道に出てしまい、事故につながるかもしれないので、車で行かなければいけないと思いました。

あまり身のまわりに点字がないことを知ったので、視覚しようがい者の方が安心してくらしらせるように、工夫をしていけたらいいなと思いました。

中学生の部

◆◆最優秀◆◆

見えない苦しみを思いやる

津沢中学校二年 宮森 美樹

私のいとこG君は、自閉症だ。お盆や正月に、G君とその家族が遊びに来るのを、私は毎年楽しみにしている。小さい頃は、四歳年上のG君に対して、年の差を感じず、障がいがあるかないか全く意識せず接していた。しかし、私が年を重ねるごとに、G君がいつもお母さんと一緒にいるところや、私の五歳年下の弟と対等に遊んでいるところを見ると、年下のように感じるようになってきた。G君は、つま先立ちで歩いたり、私の父や祖父の声を怖がって、みんなと一緒にご飯を食べられなかったり、自分が気になった事を何度も繰り返し話したりする。また、家の中の物の配置をよく覚えていて、以前来た時と変わっていると、気になって前の配置に戻そうとする。過去や未来の日付を聞くと、その日が何曜日かすぐいうことができ。動物が好きで、私の家で飼っている犬やニワトリをとっても楽しそうに見ている。物事の捉え方や感じ方が、私と全く違っていて、私にとってG君は不思議な存在だ。

私の母は、障がいのある子どもに関わる児童発達支援の仕事をしている。子ども達の身体的、精神的発達を促すことを目的に、一緒に遊んだり、活動したりしている。また同時に、障がい児のお母さんの悩みや話しを聞き、心のケアをすることも大切な一つの仕事だと聞いた。母の職場でダンス教室をしている先生にも、自閉症のお子さんがいる。だが、先生はいつも元気で活き活きされているように見えるので、障がい児のお母さんの心のケアが必要だという話を聞いても、あまり想像できなかった。障がい児の母親が、どのような状態になるのか、私には想像できなかったので、調べてみた。障がい分かるタイミングは、生後すぐだったり、二、三歳だったり、もっと大きくなってからだったり異なる。障がいをすぐに受

け入れられる人は少なく、ショックを受け絶望し、先が見えない恐怖と不安を感じ、産後うつになるケースもあるようだ。一般的な育児の本が参考にならず、自分で情報を求めて、本やインターネットで調べ、さらに不安になる。自分を責め、誰にも言いたくない、言っても分かってもらえないだろうといった孤独感を感じる。障がいを受け入れることの難しさや、障がい児をもつ母親が自分の心を健康に保つことが、どれだけ難しいのかということを知った。

G君のお母さんの優しい笑顔、ダンス教室の先生のいきいきとした姿の裏には、苦しい時間を乗り越えてきた強い一面が隠れているのだ。見えないところで苦しみ、孤独を感じる人を、一人ぼっちにしない社会でなければいけないと思う。そのためにも、私自身がまず、障がいをもつ人に関心を持ち、その人の特性は大切にしつつ、障がいのあるかないか関係なく、一人の人として対等に接していきたい。

